

6 ベトナム印象記 — 『闇』から『光』へ

井上 裕

かって、私たちの若いころに「アジア的停滞」という言葉があった。いま、NHKのTVのテーマのひとつは「疾走アジア」である。そして、60年代から70年代にかけてのベトナム戦争を素材にした開高健の『闇』3部作がある。『輝ける闇』『夏の闇』『花終わる闇』がそれであり、付随する短編集としては『歩く影たち』なども忘れられない。

こうして、ベトナムとは、私の印象では「停滞」「闘い」「脱出」などのいわば「負のイメージ」とその克服の象徴として存在した。開高健が、そのベトナム体験の文学的な結実のタイトルを『闇』で総括した（せざるを得なかった）ことは重い事実というべきであろう。その重い事実としての1千年におよぶ歴代中国王朝の支配、19世紀からのフランス植民地の時代、1945年以降のホーチミンをリーダーとする独立宣言と南北分裂・抗米闘争・75年の北ベトナム軍のサイゴン無血入城、76年の南北統一などの歴史的な推移については、ここでは、あまり語ることもない。ただ、それが『闇』から『光』への苦痛に満ちた転移の道程であったことをいえば十分であろう。

さて、今回のベトナム企業視察団に参加した私の、とりとめのない若干の印象や感想を述べる。まず、一つは「河」について。最初のハノイのタイホ・ホテルに近接して流れていたのは「紅河」(Red River)、また、古都フエのホンザン・ホテルの前面には「香河」(Perfume River)、さらにかって日本人町のあった旧市ホイアンでの長い流域。このホイアンはダナンの近くの河港で、昔、切支丹弾圧によって海外に逃走した日本人が生活したという。ベトナムの歴史的体験と同じように、「河」は流れ、転移し、変形する。なお、このホイアン流域での水上レストラン「ハンフェン」での蟹料理は白い・しまった・甘い肉や、ねっとりした蟹味噌をたっぷりと含んで美味であった。

二つめには、「アオザイ」について。アオザイはベトナムの女性の民族衣装であって、ことにその長い裳裾と鮮やかな色彩が特徴的だが、このアオザイをまとった2人のひとに触れたい。1人はダナンからフエに至るガイドのブンさん、もう1人はホーチミンでのハンさんである。ブンさんは20代(?)、色白で大柄、若く快活な人(ちなみに「ブン」とはベトナム語で「雲」の意)。ハンさんは40~50代(?)、サイゴン大学の日本語・日本事情担当の教授、やや褐色の肌で小柄な静かな人。アオザイはいうまでもなく民族固有の衣装であり、民族の自己主張の一つの表現形態といえるが、アオザイを着た2人のベトナム女性の好ましいコントラストを見た。「民族」= Nationality の伝統は転移し、変形しつつ、自己を明瞭に主張する。

三つには、「市場」について。われわれは、ハノイ市のドンスアン市場、ホーチミン市のベトナム市場、ホイアンの「日本橋」付近の市場等にも立ち寄った。それらには、「市場」特有の活気・一種の勢いが充満していた。まさに、「生鮮食品」（生きていた魚類や緑・紅・黄の野菜や果実等）と、素早く動く・眼光鋭い子供たちやその親分とみられる隻脚の大人たちでいっぱい、危険で・生き生きして・魅惑に満ちた・商品取り引きの原初的な空間。かつての戦後日本の「闇市」が思い出される。生きることへの、所得を得ることへの、明確で積極的な関与。そのための商品と貨幣の熱気を帯びた交換の場。このような「市場」の原型がわれわれから失われて久しい。

以上の、「具体的」な事柄に加え、やや「抽象的」なことに移ると、四つめに「静かな闘志」ともいふべきもの。国家計画投資省、共産党本部、社会科学人文科学研究センターなどは、われわれの公式の公的機関訪問先であった。これらでの質疑・議論を通じて、「ドイモイ」への自信と意欲、開放戦争時の苦闘と勝利に裏うちされたプライド（1975ないし76年という言葉は一種のキーワードとして、しばしば発言された）、それらを基盤とする誠実さ・率直さ・柔軟さが印象的であった。ことに、やや年老いた幹部クラスの人々の褐色の強靱な皮膚と筋肉の背後に秘められた膨大な過去の堆積を想像したのは私だけであつたらうか。

五つめに、若干ネガティブな側面についても触れておかなければならない。それは、発展途上の諸国、そしてすでに発展（？）した先進国にも共通することだが、人々の経済水準の「格差」についてである。計画投資省での説明によると、農民主体の山岳地域と都市地域との所得格差は1：5ないし1：10にも達し、貧困世帯（その定義は不明瞭だが）の割合は約20%とのことである。ちなみに、1995年時点でのベトナム1人あたりのGDP水準は269ドルで、同年の日本の0.66%、中国の46.6%にとどまっている。ハノイのタイホ・ホテルの部屋からみえるテニスコートでハイ・クラスとみられる現地の若い人たちが楽しそうにプレイしていた。他方、ハノイやホーチミンの繁華街では、土産物を売り、お金をねだる多くの子供たちのギラギラした瞳と汚れた裸足があつた。

開高健は、かつて『輝ける闇』のなかで、「サイゴン（現在のホーチミン市）には2種類の人間しかいない。中間がないんです。haves（持っている奴）と、have-nots（持っていない奴）しかいない」と記した。それは、たしかに過去の苦しい時代での、『闇』の一側面であつたが、この格差は現在でも完全に消失したわけではない。まさに、日本を含む「先進国」と同様に。

われわれの訪ベトナムの時期は3月。まだ、日本では余寒の季節だか、ハノイでは26～27度、ホーチミンでは31～32度の気温。とりわけ、フエやホーチミンでの陽光は強烈であつた。ベトナムの国民経済も、これから「ドイモイ」それ自体の変転を重ねつつ、『光』への方向をさらに明確にしていくことを予想し・期待する。